

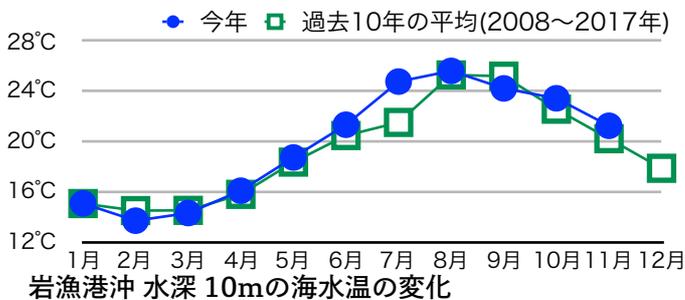
トピック まなづるの海・真鶴の海況

気温より海水温が高い冬ならではの光景



蟹気楼現象(上)、海面から立ち上る湯気(左下)、蒸気霧(別名:けあらし)(右下)

冬。この季節しか見ることでできない海の景色があります。蟹気楼(しんきろう)現象は、冷えた大気が海面のそばで温められるため、その温度差によって光が屈折する現象です。真鶴からだと、冬によく晴れた日に湘南方面の建物が伸びたり、浮かんでいるように見えることがあります。蟹気楼の「蟹(しん)」は「ハマグリ」、「気」は「息」、「楼」は「建物」を意味しています。古来から中国では、蟹気楼は大きなハマグリが空中に吐いた息で描かれた楼閣(高い建物)と考えられていたそうです。また、特に冷え込んだ朝や雪が降るような寒い日は、海面から湯気(蒸気)が上がり、それが多い場合には海面近くに霧がかかったようになります。これを「蒸気霧」や「けあらし」と呼びます。この冬の景色は、大気の気温よりも海水温が高いために引き起こされる現象です。横浜国立大学の定期調査によると、真鶴町岩漁港沖の海水温は11月には21.5℃まで下がってきました。しかし、12月～2月は気温の方がもっと低くなり、日中の最高気温ですら、海水温より高くなることはほとんどありません。真冬の風がない穏やかな夜は、海辺に行くといつとも暖かく、気温の差を実感できることもあります。<データ提供：横浜国立大学>



真鶴の海中の様子

透き通るブルーの世界

冬の真鶴の海はプランクトンが少なくなり、一年でいちばん水が透明な時期を迎えています。水深20mでも明るく、たくさんの生物たちが視界に飛び込んできます。水温は20℃を下回りはじめ、多くの方がウェットスーツ(水着の上に着るもの)から、ドライスーツ(手と顔以外は水に濡れず、服を着たまま着るもの)へと衣替え。ダイバーの冬の装いです。もちろん、季節来遊魚(暖かい季節に南からやってくる魚)は少しずつ姿を消し、生物たちにも厳しい季節を迎えますが、寒い時期にだけやってくるめずらしい魚もこれから見られるようになります。

四季を通して、いろいろな姿を見せてくれる真鶴の海ですが、その姿をダイバー以外はあまり目にできません。そこで、真鶴町立遠藤貝類博物館では、ダイバーの皆さまから真鶴の海で撮影した



岩漁港沖のダイビングスポットの様子12/16

写真を募集します。写真は、来年2月8日から町立遠藤貝類博物館で展示をさせていただきます。また、博物館の教育・普及活動でも利用させていただき、町内外の子どもたちなどに真鶴の海の素晴らしさを伝えさせていただきます。募集の詳細については、町立遠藤貝類博物館HPをご覧ください。



真鶴の漁獲情報

マンボウはじめ様々な魚種が水揚げ

冬に近づくにつれ、漁獲量は落ちてきました。一方で、秋から引き続き、さまざまな魚が水揚げされています。12月の初旬には置2枚ほどの大きさのマンボウが7匹入った日もあったそうです。マンボウは肝醬油でいただくのが基本的な食べ方ですが、腸もとても人気だとのことでした。他にもハガツオやスルメイカ、イナダ、サバなどいろいろなものが水揚げされています。今回写真でご紹介するのは、今が旬のキンメダイ。真鶴周辺では水深100m前後で少し小ぶりのもが多く水揚げされています。真鶴では陸地からすぐそばに深い海があるので、漁場までが大変近く、新鮮なものが手に入ります。煮付けとお刺身をいただきましたが、煮付けの汁につけて食べたお刺身が驚きの美味しさでした。<情報提供：真鶴町漁協>



キンメダイ

2019年1~2月の町立遠藤貝類博物館のイベント

- 1月19日(土) 真鶴自然こどもクラブ「お林をたんけんしよう」
真鶴町・湯河原町の小中学生対象、詳細は博物館へ
- 2月10日(日) 海のミュージアム「真鶴半島ジオストーリー体験ツアー」
町立遠藤貝類博物館・真鶴半島【要予約・要参加料】
- 2月17日(日) 真鶴自然こどもクラブ「海辺の町をたんけんしよう」
真鶴町・湯河原町の小中学生対象、詳細は博物館へ

まなづる 海の月報は、町立遠藤貝類博物館 HPからダウンロードができます。プリントしていただいての掲示・配布歓迎です。